

## 「わたしのほんごプロジェクト1-2 に参加して得た学びと課題」

### 1. はじめに

筆者が「日本語教育実践研究(5)」(以下、「実践(5)」)を今学期に選択した理由は、前学期に文法論の授業で学んだ「状況から出発」の授業はどのように進めていくのか、理論から実践へ連続した学びを経験したかったからである。筆者は中級以上の日本語学習者に対して専門分野の教育経験しかなく、初級の日本語学習者はどのように日本語を学んでいるのか、習得していくのかといった部分に興味を抱いたからである。

実践(5)では授業の最初に各自「私の目標」を立てた。その目標に対して①「文型」や「表現」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し実現する、②1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動を組み立て実践する、③自分が立てた目標(Moodle「日本語教育実践研究(5)」(秋)の掲示板内)の3つの点から自分の目標達成度について述べていきたい。

### 2. 実践(5)の目標について

第1回目の授業で立てた筆者の目標は、

- ①「学習者主体の授業をする」
- ②「学習者の生活環境に落とし込んだ授業内容にする」であった。

本実践では、全14回のわたにほの「話す」と「打つ」の実践授業のうち、筆者は「話す」の復習授業を担当した。自分の目標に沿いながら小林先生の挙げた3つの目標に達成度について述べていきたい。

#### 2-1) 「文型」や「表現」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。

まず、「状況からの出発」について述べたい。筆者は2000年の春学期に「文法論」を受講した。その際に印象に残っている事例がある。小林(2017)「状況から出発する」アプローチ」の事例1である。事例に出てきたアリスさんの現在の思考と未来の行動がまさにロールプレイと現実世界の違いであり、これが「状況からの出発」なのだとして理解した。文法論の授業を受ける前までは、決まった文法シラバスや機能シラバスがあり、シラバスの順番通りに教

えていく事が当たり前だと考えていた。しかし、文法論の授業を受講し、教師が学習者の取り巻く状況に寄り添う授業をする事は、学習者が生きたコミュニケーションを学べる事や、学習者の意欲を上げる事に繋がると考えた。

今回、文法論の受講経験を元に実践(5)に臨んだが、一言でいうととても難しく感じた。教案作成の際は、目標の立て方やスモールステップの作り方が難しく、自分の能力のなさに恥ずかしさを感じた。難しかった点として、大きく2点ある。

1点目は、「状況から出発」の視点を取り入れた授業をしたいと考えていたが、今までの教育経験や育児経験が自分の標準となっており、教案作成当初は自分の範疇内の考えからはみ出せず苦勞した。今振り返ると、自分の「教える」行為は一方的な知識の提供や、困っていたら与えるといった GIVE 的な考えが染み付いていたと考える。筆者の一方的な「教える」といった固定観念が下地にあったため、学習者が自由に考え、自由に選択していく教案やデザインの作り方が分からなかった。それ故に、初めは色々な状況設定を提示した上で学習者に答えを選択してもらうような教案のアイデアしか浮かばなかった。状況設定をしたり、答えの選択肢を範囲の中でしか与えていない時点で教師目線の教案作成であったと反省している。しかし、小林先生や他のたまご先生のアドバイスに耳を傾け試行錯誤していく事で、最終的に目標の視点・目標への落とし方について学べた。

2点目は、大きな目標の立て方とスモールステップのアイデアの難しさを挙げる。復習単元の目標を立てる際に、キーワードとして「学習者主体」「話す」「復習」といった3つのキーワードで何が提供できるかを考えた。目標を立てる際は、学生目線と学生のアウトプットを意識して作成したが、教師目線の日本語の使用や、伝わりにくい書き方の指摘を受けた。アウトプットの方法では、学習者が楽しめるゲームやトピック内容を積極的に聞いて取り入れて試みた。しかし、そこで重要なのは、「皆が楽しんでくれる」という要素だけでなく、「なぜそのゲームを取り入れたのか」の視点が欠けていた。年代を超えて色々な視点を取り入れたいという思いも大事だが、その内容を取り入れる事で学習者がどのように変化していくのかをより深く考える事が重要である事を学んだ。日本語教師の視点で授業を作る際に重要な視点である。

また、分かりやすくスモールステップを提示方法として、教師目線の言葉の使用をやめる、分かりやすい日本語の使用をする事が「状況の中で言語とコミュニケーションを捉える」に繋がるのではないかと考えた。教案は作成

初期より改善したものの、より伝わりやすい表現方法について学んでいく事が課題である。

## 2-2) 1人1人の学習者にとって「+1」になる活動を組み立て実践する

筆者の担当は「話す」の復習であった。復習のワークとして「自分の日本語リストを作る」「作成したリストをシェアする」「トピックについて話す」を実施した。これらのワークを学習者にとって「+1」となる授業になる為に、以下に気を付けた。

- ① 授業内容を分かりやすく、やる事を簡潔・明確にする
- ② 説明をする授業はしない（レッスン1～7回迄の復習説明はしない）
- ③ 学習者が各々学べるような内容にする
- ④ 学習者が主体となって取り組める内容
- ⑤ どのスモールステップ（ワーク）も学習者が選択できるようにする
- ⑥ 自分で振り返る作業⇒他者と共有⇒新たな学びと応用をアウトプットできるような一連の流れを踏んでいく

といった点を意識して取り組んだ。しかし、上記の点を意識してワークを作成するまでに根本的な反省点があった。それは「復習の定義をはき違えていた」ことであった。当初考えていた復習ワーク案は、1～7回の授業で学んだ日本語を再度復習していく案や、学習者が困る場面を想定したコミュニケーションの問答を提示する案であった。しかし、小林先生や他のたまご先生とのズームディスカッション、教案シートへの書き込み、מודルのコメントからのアドバイスにより「復習とは何か」を改めて考える機会となった。今までの講義を再度分かりやすく説明する、講義を振り返る事が復習であるといった自分の浅い復習の定義がそのまま教案に反映していたと反省した。しかし、今後の教案作成を考える上での新たな気付きになった事は大きな収穫でもある。「+1」に繋がる活動とは、どのようにインプットとアウトプットをさせるか、という視点で考えなければならない事を学んだ。

「+1」の活動を提供する上で提示の仕方も重要である。提示の仕方によっては学習者が受動的な学びになる可能性もあるからである。情報を与えすぎても、少なすぎてもいけない事を学び、そのバランスが非常に難しかった。理解してもらえるように詳しい説明をし過ぎていたり、どの日本語レベルに標準を合わせて提示すればよいか、英語表示の分量はどの程度すればよいか分からなくなっていた。その際に、小林先生が授業で仰っていた「学習者の目線」で言葉選びをする重要性を感じた。

最終版のリストは1～7回の授業スライドで学んだ日本語だけでなく、毎回行われるグループディスカッションの中で学んだ日本語も含めて、自分が好きな日本語を振り返りながら自由に書き込んでもらう形式とし、どこに、何を書き込めばよいかを分かりやすく表示した。以下は筆者の復習の授業で使用した日本語リストの例である。

図1 (わたにはほ実践(5) 第8回復習教案より抜粋)

<学んだ日本語>	<英語> (日本語で書けない場合)	<グループワークで話し合っ て新しく学んだ日本語>	メモ
Ex) はじめまして	Nice to meet you	・はじめましてはフォーマルで、2回目からは「ヨッ」「オッス」などカジュアルでよい	
Ex) おすすめはなんですか？	What's your recommendation ?	・お店で質問する時に使う	

図2 (わたにはほ実践(5) 第8回復習教案より抜粋)

自己紹介の時の日本語はどんな日本語を使う？		
あいさつの時はどんな日本語を使う？		
感想をいう時に使う言葉は？		

振り返ると、もう少し分かりやすい項目にするべきだったと考える。色んな日本語レベルの学習者に対応できるようにフリガナを付けることや、分かりやすい日本語の表現、もっと単文にできたのではないか、といった点を改めて感じた。しかし、学生からのポストタスクや他のたまご先生からのコメントで、復習リスト作成についてはとてもよかったとコメントを

頂けた。

また、筆者がもう一つの目標にしていた「学生の生活環境に落とし込んだ授業内容にする」について述べる。教案作成当初はできるだけ学習者が興味を抱くゲーム性のあるワークを取り入れる事や、学習者が困ると予測される場面を設定していた。しかし、自分の経験や情報のズレが生じていたと考える。その復習は本当に学習者のためになっているのか、復習の授業をした後に学習者達はどうなっているのか、といった根本的な視点を考える機会となった。授業を受けた後に学習者にどうなって欲しいかを考えて実践していく事が「+1」ではないかと考えた。

筆者が他の授業でたまご先生の役回りの際に、学習者にとって「+1」になるように留意した点を述べたい。それは、質問をしやすい雰囲気をつくらせたまご先生が作る事、そしてたまご先生の質問の仕方をクロードクエッションではなく、オープンクエッションの聞き方をする事も「+1」に繋がると考えた。それはレッスン1~3回までのたまご先生の経験からである。例えば「わかったかな？」と質問して「はい」としか返答されず会話が續かない事があり、上手く学習者の思いを引き出せなかった経験があった。「どんな事に興味をもっているのか」「どうして好きなのか」「〇〇さんはどうしたいか」といった質問の仕方を変える事で、学習者の「+1」に繋がると考えた。

加えて、筆者はすべての情報を与えないことにも注意した。分からないからすぐに教えるのではなく、まずはヒントを与えて学習者に考えてもらうようにしていく事も学習者の「+1」に繋がると考えた。しかし、この点は、学習者が分からないとすぐに教えてしまう筆者の悪い癖があるので、常に意識していく必要があった。

### 3. 「私の目標について」

ここで再度筆者の目標を挙げておく。

- 1) 「学生者主体の授業をする」
  - 2) 「学習者の生活環境に落とし込んだ授業内容にする」である。
- 上記の目標を①授業時の観察、②学習者からの事後課題の結果、③たまご先生からのコメントから考察していきたい。

#### 3-①. 授業時の観察

授業の観察からというのは非常に主観的ではあるが、復習リストを各自作成していた時は、筆者の目から見て黙々とリストに向き合っている学習者が多い

と感じた。各グループを巡回している際に、「先生、紙もう一枚ある？」や「紙って余分にありますか？」と学習者やたまご先生から質問を受け、紙を配り回った事が意外で驚きであった。筆者は当初、「復習リスト1枚を完成させるのも大変ではないか」、「たくさん記載する人は少ないだろう」と予測していた為、余分なリスト作成用紙をあまり準備していなかった。その為、小林先生にコピーの追加を何度もお願いしてしまった事は反省点であり、色んな予測を立てて準備をしておくべきである事を学んだ。

他にも、学習者が「こんなことを日本語言いたい、でもなんて言うの?」、「こんな時はなんていえば良いのか?」といった質問をたまご先生と会話をしながらリストを作成している光景をみて、当初不安を抱いていた「すぐに飽きるのではないか」、「分からないと投げ出してしまわないか」といった不安が解消した感覚を覚えている。自分が知りたい・学びたいという思いから出てくる表現の学習は学習者の「+1」に繋がると共に、教師の「生徒を信じる」に繋がると感じた。「作成したリストをシェアする」や「トピックについて話す」のワークでは、それぞれグループがおおよそ活発な話ができたと授業の観察を通して感じた。授業の最後に拍手があがったのは少し嬉しかった。

しかし、授業で感じた事は筆者の主観的な観察であるため、客観的な点から目標達成とは言えない。

### 3-②.学習者からの事後課題の結果から考察する

30人のポストタスクの内容で、授業やたまご先生の対応を含め肯定的な言葉が入っていたコメントについては肯定的と判断した。

授業後のポストタスクでは30人中23人は肯定的なコメント、3人は授業で習得した内容、1人は否定的なコメント、1人は欠席者、2人は未提出という結果であった。肯定的な学習者のコメントでは「楽しかった」、「リストがよかった」、「復習になった」などのコメントがあった。否定的なコメントでは「今日つまらなかったと思う。何も新しい事を勉強しませんでした。具体的な学んだことを並べるのがちょっと難しいです」とあった。クラス全員の満足度を上げるのは難しいと感じたが、様々な視点を持つ学習者があり、次回はその学習者も主体となって学べる事を提供していきたいと改めて感じた。

しかし、学習者のコメントはたまご先生への配慮が含んでいると考えられるため、学習者のコメントをもって目標達成が出来たとはいえないと考える。

(Moodle「Lesson8 ポストタスク」より)

3-③次にたまご先生からのコメントから考察する。

たまご先生のコメントは良い所と改善点を述べてくれている。

(以下、Model 第8回に振り返りをワークのみの感想を略して抜粋した。)

<良かった点>

- ・それぞれが自分らしい日本語を体得に繋がると感じた。
- ・たくさん話せた事と、それを補助するワークシートやトピックも効果的であった。
- ・フリートークが盛り上がった
- ・学習者が選ぶという方法を取ってよかった
- ・リストがよかった。
- ・フリートークはたまご先生が要らないくらい盛り上がった。
- ・前回の授業の何がよかったかなどを共有できた
- ・学習者に埋めてもらうリストの作成は「表現の紹介で終わらない」という目的を実現した良い方法だと思う
- ・自分からトークテーマを出すのが良かったと思う
- ・リストを埋める学習者が多かった。

<改善点>

- ・リストの書き方が分からなかったので説明が必要だった。
- ・グループで孤立している学習者がいた  
⇒授業中に筆者がたまご先生の移動を試みて改善した
- ・リストを埋めるために機械的に感じがした
- ・前回のリストをみないと難しい学習者がいた  
⇒これについては、自らスライドを振り返ることで内省すると筆者は考  
えている
- ・前回欠席した学習者へのフォローに対して考慮が必要
- ・スライドを見ても表現を殆ど思いつかず、PPTをみてもなかなか書けなかった  
ので困った
- ・学んだ表現をどう使えばよいかの説明に悩んだ
- ・リストを1枚考える時間が多く、2枚、3枚とは進まなかった
- ・フリートークの時は参加せずに沈黙の学習者がいた
- ・資料の言葉が本当に教師の伝えたい事を学習者に伝えられているか考える  
必要がある
- ・ステップ1～3の流れは各グループで異なるので、たまご先生に委ねる方

がよい

といったたまご先生からのコメントがあった。実践をしないと分からない点や、自分では気が付かない視点をもらったと考える。

以上、①～③点の観点から総合して、「復習リスト」や「フリートーク」は復習の単元ワークとしては有効であったと3つの視点から考えた。しかし、各段落でも述べた様に数多くの課題があり、まだまだ改善の余地がある事は自覚している。その点を今後の実践に繋げていきたいと考える。

小林先生が授業の中でいつも仰っていた「生徒を信じる」ことは自由度を上げる授業なので勇気がいる事だが、その背景には教師側の密な準備が重要であることを学んだ。

#### 4. 参考文献

- (1)小林ミナ (2017) 「状況から出発する」アプローチ」『早稲田日本語教育学』22, 101-113. <http://hdl.handle.net/2065/000541052>. (閲覧日：2023/1/30)

以上